

ライフサイクルと人類史

武 田 久 義

キーワード：エリクソン，ライフサイクル，Virtue，人類史

一．はじめに

現代は混迷した時代である。近代の産業社会から情報化社会への移行により、社会は大きく姿を変えつつある。そして情報化社会という、これまで人類が経験したことがない未知の社会の出現によって、社会全体が方向感覚を失っているように見える。それでも、情報化社会そのものがどのような社会であるのかについては、これまでの精力的な研究によってある程度の姿を描くことは可能である。しかしその中であって人々はどのように在るべきか、どのような生き方が社会全体にとっての幸福を増大させるのかについては、未だ明確な姿が描かれていない。本稿は、このような問題意識のもとに生まれたものである。

筆者は、これまでは人類史を大略次のようにとらえてきた。すなわち、狩猟・漁労・採取等の、ほとんど自然にそのまま依存した社会が人類の原初の形態であった。その後、人類が自然に働きかけ自然を改変するようになってから、人類は大きな変化を遂げるようになった。その後、人類の文化・技術は緩急の差はあるものの、着実に進展してきた。そしてそのような人類の社会の変化を概観すると、いくつかの顕著な変化の段階を見ることができる。

西洋社会を念頭に置いた場合、人類史における大きな変革期として、第一に食糧革命とそれによって形成された農業中心の社会があり、基本的には古代・中世社会がこれに相当する。第二の変革期は、産業革命によってもたらされたもので、近代以降の産業社会がこれに相当する。そして第三の変革期は情報革命による新しい社会の到来で、現在および将来がこれに当たるというものである。本稿における新たな提起は、以上のような見解を覆すものではない。しかし、これまでの考え方に一定の修正を加えるとともに新しい視点を付加することを意図している。それは、後述するように、人類史における情報化社会を人のライフサイクルにおける成人期と対比させることによって、情報化社会の性格を鮮明にすることを意図しているものである。このような新たな視点からのアプローチによって、混迷する情報化社会に対する新たな将来展望を可能にする可能性があると考えからである。

さて、万物は絶えざる変化のもとにある。万物の変化を宇宙の歴史 - 地球の歴史 - 生命体の歴史 - 人類の歴史 - 個人の歴史として把握することが可能であると、筆者は考えている。本稿は、この中では時間的・空間的に最も短く小さい関係にある人類の歴史と個人の歴史に焦点を当てるものである。そして、人類史における変化と人のライフサイクルにおける変化との間に相似性があるのではないかという仮定のもとに論を進めようとするものである。すなわち、試論的に「人類史と個人史の相似性」を提起する。それは、人類史におけるそれぞれの段階が、一人の人間のそれぞれの成長段階に対応するという発想である。

この研究を通して筆者が最終的に目標としているところは、現代社会における諸現象を究明し、あるべき社会像を考えることである。すなわち「理想的人間のライフサイクル」を一つの参考として、「理想的人類史」を指定する。そして社会のあるべき姿、あるいは可能な姿と現実との乖離を明らかにすることによって、あるべき社会とそれに近づくための道筋を設定するというものである。そして本稿はその第一段階として、人のライフサイクルと人類史のそれぞれの段階の類似性について説明しようとしている。そして本稿では、

主として、人類史と人の一生についての相似性の枠組みを提示することを目的としている。したがって、本稿の第三節「人のライフサイクルと人類史の対応」において用いた用語に関して、本来は厳密な検討を経た後に本論を展開すべきだったかもしれない。このような問題点を意識しつつも、とりあえず本論を提示したことをお断りしなければならない。

ところで本稿では、次のような三つの前提を置いている。

その一つは、人類は当然ながら生命体全体を支配する生物学的法則に支配されており、生命体は地球を支配する物理・化学法則に支配されているということである。¹⁾それは、物理・化学的歴史と生物学的歴史（地球史）の自律的展開を承認するものである。このことは、個体としての生命体が誕生以後に自らを成長させ、やがては衰退し死滅するに至ること、そしてそれと同様に人類もまた誕生から死に至るプロセスを辿るということである。それだけでなく、本稿では文化史的歴史（人類史）の自律的展開をも承認する。それは、文化の独自の発展と歴史が展開していくうちに、歴史の進行を司るものは主体の手を離れてシステムへと変化することを認めるものでもある。それは、いわば「人類史的法則」とも呼ぶべきものであろう。

二つ目の前提として、個人のライフサイクルにおける主要な環境は、それぞれのライフサイクルの段階を上るにあたって親、家庭、友人、社会、自然と拡大・変化するということである。これと同様に、人類史における主要な環境も、自然環境第一の段階から順次社会環境を含む段階へと拡大・変化するということである。

そして三つ目の前提として、人がそれぞれのライフサイクルの各段階を上っていくためには克服しなければならない課題があると同時に、人類史においても各段階を上っていくためには、克服すべき課題を有しているということである。しかしながら、人の身体が年齢を経るに従って成長を遂げると同時に人類史もまた固有の変化を遂げるので、たとえば人のライフサイクルにおいては、それぞれの段階における固有の課題をたとえ達成しなくとも外見的には成長しているように見えるように、人類史においても固有の課題を達

成しなくても人類史はそれ独自の仕方に変化するということである。

本稿は、個人のライフサイクルと人類史についての見取り図の概要を提示することを目的とし、また考察の対象をその範囲に止めている。したがって、両者の関係の厳密な対比・検討は、別稿において行う予定であることをあらかじめお断りしておきたい。

二．人のライフサイクル

人のライフサイクルについての提示を行ったエリクソンは、人の一生をどのようにとらえていたのであろうか。筆者なりの考えを入れつつ、簡単にまとめてみたい。²⁾

人は、それぞれの誕生から死に至るまで一貫性、同一性（アイデンティティ）を保持し続ける。そして人は、身体的、心理的、文化的、時代的な存在であり、それらのもとで全体的かつ同時に把握されるべきものである。人はこれらの全体的な環境のもとで同一性を保ちつつ成長・発達するのであるが、その成長・発達を促す基本的な力として、Virtue（人格的活力）と呼ばれるものが存在する。すなわち、人はそれぞれの同一性を保持しつつ、発達の各段階において基本的な力として作用する Virtue に促されて、次の段階に進んでいくのである。これが漸成的発展（epigenesis, epigenetic development）と呼ばれるものである。ここで重要なことは、Virtue はそれぞれの段階で異なった様相を持って現れるということである。Virtue を筆者は、人間の「生きる力」に深く関連した内在的な力ととらえている。この力は、人間に生涯宿っており、人間を生かし続けるものである。そしてそれは、ライフサイクルのそれぞれの段階において最も重要とされる様相をもってあらわれるのである。したがって Virtue は、生涯変わることのない力である。それと同時に、ライフサイクルの各段階においてあらわれる主要な様相の二側面を併せてとらえるべきであろう。

そして、より上位の段階に進むにあたって、人は危機と呼ばれるもの乗り越えなければならない。この場合の危機とは、「岐路であり、決断の時である」ような事態ないし状況である。³⁾そしてこの危機は、発達のための決定的な契機として必要なものである。それは、それまでの心的体制を発達の時期にあわせて再体制化し、統合する心の働きとして生涯にわたって繰り返されていくのである。⁴⁾そしてこの危機を着実に乗り越えることによって、人は一歩上の段階に進むのである。なお危機の克服に失敗した場合、たとえば、停滞あるいは早熟のようなかたちで、一種の病理現象があらわれる。そしてこのように同一性を保ちつつも大きく変化する現象は八つの段階を持っており、それは人のライフサイクルとしてとらえることができる。

最初に Virtue について考えてみよう。

筆者は Virtue を、人を生かす根源的な力ととらえているのであるが、それはライフサイクルの各段階においてそれぞれ異なった様相をもって現れる。それぞれの段階における Virtue の現れ方を、簡単に述べておこう。⁵⁾

(1) 希望。求めるものが得られるという確固たる信念であり、また、個人の持つ信仰の基盤である。希望は、生涯のどの階層においても必要な活力で、パーソナリティの漸成にとって「土台」ともいえる。希望は、第一の最も根源的で、しかも、最も長く続く人格的活力である。これは、最も安定していると同時に、次々に達する発達の階層に応じて新しい特性を持つようになる。

(2) 意志。羞恥や疑惑の体験を持ちつつも、自己の自由な選択の努力をする不断の決意である。意志力は、法と義務を受け入れる基礎であり、法の精神を体得した両親の公正な態度によって育てられる。

(3) 目的。価値ある目的を心に抱き、実際に追求する勇氣である。これは、目指す方向を持つ強さであり、想像によって育てられ、罪の意識によって制限を加えられる。

(4) 能力。課題の完遂にあたって、道具や知能を自由に使用することである。この能力が基礎となり、技術を用いて他者と協同する力が培われる。

(5) 忠誠心。避けられない価値体系の矛盾にもかかわらず、自ら自由に選んだものに熱中し、おびたしいエネルギーを捧げる能力で、これこそアイデンティティの基礎である。

(6) 愛。自分の何かが失われるという恐怖なしに、自分の同一性と、他者の同一性を融合する能力をささえるものである。愛は個人の親密性を深める。

(7) 世話。対象にとって必要のように配慮したり、手をかけることである。自分の子供やよその子供を育てること、他者への協力、生活物資の生産、文化的な事物をつくることまで、その範囲に含まれる。

(8) 英知。死に直面しながら、生そのものへの執着のない関心を持つことである。身体的な衰弱や知的機能の衰えにもかかわらず、統合された経験を維持し、他に伝える努力である。また、後世へ遺物を遺すため、来るべき世代の要求に応え、しかも同時に遺すべきすべての知識が絶対のものではないことを自覚していることである。

人は、Virtue に基づいてそれぞれの段階を生き、次の段階に進むのである。しかし、次の段階に進むにあたって、大きな課題を課せられている。それは、一つの危機として現れる。そして、すでに述べたように、人はこの危機を乗り越えることによって、一段上の段階に進むことができるのである。

ライフサイクルと危機は、次のように図示することができる。⁶⁾

ライフサイクルと人類史

(図 1) ライフサイクルと課題 危機および Virtue

成人後期	Ⅷ							自我統合性 対 絶 望 英知	
成人中期	Ⅵ						生産性 対 停 滯 世話		
成人前期	Ⅴ					親 密 対 孤 独 愛			
青 年 期	Ⅳ				アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散 忠誠心				
兒 童 期	Ⅲ			勤勉性 対 劣等感 能力					
幼児後期	Ⅱ		自覚性 対 罪悪感 目的						
幼児前期	I	自律性 対 恥、疑惑 意志							
乳 児 期		基本的信頼 対 不信 希望							
		1	2	3	4	5	6	7	8

それでは、ライフサイクルのそれぞれの段階の特徴について、簡単な説明を行うこととしよう。⁷⁾なお、それぞれの時期の()内は、課題 - 危機を意味している。

(1) 乳児期 (0 - 1 歳)(基本的信頼 - 不信)

乳児の行動は、口にのみ込むことに見られるように、口から取り入れることを基本としている。しかし、自分の肉体的・生理的欲求を自分の力で満足させることはできない。その点に関しては、全く無力である。乳児は、他者とくに母親の世話に全面的に依存する存在である。すなわち、外界に対しては、受容的であることを大きな特徴としている。

この時期の課題は基本的信頼であり、それに対応する危機は、不信である。ライフサイクルのこの時期において、乳児は、「希望」という Virtue に促されて、様々なものを取り入れる。そして満足が得られる場合には基本的信頼は増大し、外界と一体化する。しかし、このことができない場合、すなわち

欲するものを得ることができなかった場合には、それは不信の感覚となる。このように、とくに母子関係における基本的信頼感の獲得が希望のための基盤である。⁸⁾

この時期に基本的信頼感が確立されると、次には自律という課題に挑戦することになる。

(2) 幼児前期(1 - 3歳)(自律性 - 羞恥・疑惑)

幼児前期には、全身の筋肉が発達し、身体のコントロールが可能になる。たとえば、自分の足で立ち、歩くようになる。また、自発的に手放したり、落したり、投げたりするようになる。このように幼児前期には、人は自らの「意志」に促されてものごとを行うようになるのである。そしてそのこと自体が目的であるかのように、同じ動作を繰り返し行うようになる。また、発語はこの時期の最大の特徴の一つである。そして発語とほぼ同じ時期に、「イヤ」というような自己主張が行われるようになる。この時期、子供は、「母親を信頼すること、さらに、自分の世界を信頼することを学習したときに、初めて自分で意志するようになるのである。そして、発達した筋肉組織を意志の力で使うことを学ぶようになる」のである。⁹⁾

そしてこの時期の課題は自律である。自律とは、「自分で自分の行動を規制すること、文脈に応じて正しく自己の立場からの判断に従って行動を統制するのが可能なこと」¹⁰⁾である。「この時期の自律性は、環境に対する積極的な身体的探索であり、自分自身の衝動や欲求や運動能力や技能に安定性を見出すこと」である。¹¹⁾この時期になされる外部の命令は、基本的に幼児が自分の足で立つように励ますものである。しかし、過度に行われ、それが強い場合には無力感からくる強い自己防衛を生み、強迫的行動になる可能性もある。さらにひどくなると、混乱状態になり、「人目にさらされる」「自分の弱さが他人の前にむき出しになっている」「命令に従う能力がない」という感覚を生む可能性がある。これが恥の感覚の原型である。¹²⁾

この時期に自らの「意志」に基づいて自律的に行動することが身に付けば、次の課題である自発性に向かって進むことになる。

(3) 幼児後期 (3 - 6 歳)(自発性 - 罪悪感)

「この時期の子どもは、幼児前期で獲得した自律性や意志にもとづいて、積極的に、自分の設定した目的を達成することに向かってゆく。」¹³⁾ この時期のVirtueでもある「目的」とは、「目的意識をもって、自分の目的行動を達成してゆこうとする力であり、その目的達成のために自己の活動を方向づけ、集中させてゆく力である。」¹⁴⁾ すなわち、「目的」とは、「めざす方向性を持つ強さであり、心に描く空想や、自分で素晴らしいと思う目的や目標を達成可能なものにしてゆく力である。できること、できないことといった自分の能力の及ぶ範囲の中で実際に追求してゆく勇気でもある。」¹⁵⁾

この時期に子どもは、積極的に動き回る。そして、真面目に遊びに取り組む。この中で子どもは、集中的に取り組むこと、最後までやり遂げること、そして共同することの喜びを感じるようになる。そして言葉が著しく発達し、言語的に外界に係わっていくようになるのも、この時期の著しい特徴である。そしてこの時期、子どもはしきりに比べることを行うようになる。また、たとえば父、母、祖父、祖母等の一定の規則性や秩序を人間関係の中に見ようになる。そのほか、文字・数字等の体系化された記号への興味を示すようになり、「将来の組織的な教育を受ける準備がなされる。」また、「他者の立場に立って考え、自己を把握することが可能になる。」¹⁶⁾

子どもが様々な面に積極的に係わることについては、すでに述べたところであるが、この時期の積極性は、「自己の外的世界に対する積極的な概念的探索であり、概念化により、外的世界の秩序性、規則性を得て、安定したものとして把えて自分の支配のもとにおこうとする試み」である。すなわち、「この時期の発達課題である「積極性」とは、知的好奇心の発揮であり、環境に対して独立して対応してゆくための内面的規則（概念・推進力・道徳・良心）を発達させてゆく契機である。」¹⁷⁾

この時期の課題は、自発性である。自発性は、自己確立のプロセスである。すでに述べたように、この時期の幼児は積極的に動く。しかし、やり過ぎの罪悪感もまた、あり得るのである。¹⁸⁾

さて、幼児後期の Virtue についてである。「意志」および「目的」、そして次の段階である児童期の「能力」は、我々を生き生きとさせる内的な力であり、自我の強さと密接な関連を持つものである。これらの三つの Virtue は、第一階層の「希望」から順次、「意志」「目的」「能力」へと発展してゆくのである。¹⁹⁾

(4) 児童期(6 - 12歳)(勤勉性 - 劣等感)

子ども達はこの時期に、心理的には大人になるべき初歩的な歩みを開始する。「勤勉であれば報酬や賞賛を得られること、それ相応の所産も得られることを知る。それで、子どもたちは自分のもっている能力やエネルギーを生産の場で発揮しようとがんばる。ある一定の技能や仕事に進んで身を入れようとする。その過程で勤勉の観念を発達させる。能力を築きあげて、意味のある仕事を遂行しよう、という熱意をもった勤勉感が生じる。」²⁰⁾ このように、この時期に子ども達は、能力という Virtue に促されて勤勉に働き、多くの知識・技術を取り入れようとする。勤勉性とは、他に働きかけ、他を統制し、自己の世界につくりかえていく技術獲得のプロセスである。行動のレベルでは、忍耐強く勤勉に働いて仕事を完成させる喜びをえることである。そして、これまでの経験の質が問われることになるのである。すなわち、基本的信頼感をもち、自律性を獲得し、自発的に行動することができれば、ものを学習し、発見し、学ぶ世界から喜びを得ていく有能感を得ていくことが可能となる。²¹⁾ しかしこれに失敗した場合、劣等感となってあらわれる。

また、この時期に、関心が外界に向き、盛んに知識を取り入れるようになる。そしてまた、強い好奇心を持ち、客観的に自己を評価するようになる。

(5) 青年期(12 - 20・25歳)(アイデンティティ - アイデンティティ拡散)

この時期における最大の特徴の一つは、身体における顕著な変化である。そして、この時期、人はエネルギーにあふれており、真の自分を探すことに力を尽くす。青年は、「自分は何者か」「何をなすべきか」等々に悩む。これは、いわば「永遠の問」である。しかし、青年期にはそれが顕著なかたちであらわれる。そして青年は、様々な試行錯誤を繰り返しながら、自己確立の

ための努力を行うのである。そしてそれは、様々な対人関係において行われるが、重要な対人関係として仲間の集団がある。そこで青年は語り合い、理解しあいながら、一步一步自分なりの納得のいくやり方で、自己確立へ向けて歩いていくのである。これが、アイデンティティ形成の重要なプロセスとなるのである。そしてその際に重要なことは、「自分の内面世界に耳を傾け、その感覚を研ぎ澄ましていく作業の中に、どの程度「わたしたち」という相互性の感覚・共同感覚や、現実のなまなましい生活感覚や、社会的関係をはいりこませることができるかということである」²²⁾

そしてこのアイデンティティの確立には、当然ながら乗り越えるべき課題 - 危機が存在する。すなわち、自我同一性と同一性拡散という危機である。自我同一性とは、「個々の自分を内的にささえ、統合する役目を果たす自分(資質)を言い表す概念である」²³⁾そして同一性拡散とは、同一性を未決の状態におくことである。²⁴⁾ 青年が、この同一性拡散という危機を乗り越えたとき、青年は「人格的活力としての忠誠(fidelity)を身につけるようになる。忠誠とは、価値体系の矛盾があるにもかかわらず、自らが選んだものに忠誠をつくす能力である」²⁵⁾

すでに述べたように、青年はエネルギーにあふれている。そして絶えず自己への探求を求め続けている。このエネルギーを「社会の目標に向かって動員することができるならば、社会の側にとって、忠誠は社会秩序のイデオロギーを支持する新しい活力となるのである。また、青年の側からいえば、個人レベルの同一性と共同体同一性(連帯)とを結びつけるような力を開花させたことになるのである」²⁶⁾

(6) 成人前期(20・25 - 30歳)(親密性 - 孤独)

この時期、人は青年期で習得したものを土壌にしつつ、そこから脱皮して一個の人間として他者を包容しうるだけの豊かな人間性を持つことが要請される。²⁷⁾そして青年期に自我同一性を確立した人は、成人期に他者の営みの中に自己を係わらせていながら共に与えられた問題解決に処していくことが可能になる。この忠誠心を前提として、成人前期の親密性が獲得され、この時

期の Virtue である「愛」が培われていく。自分の親密性と他者の同一性を融合していく能力としての親密性が愛によって支えられ、育成される場合には、そのようなかわり合いが大きな犠牲や妥協を要求したとしても、必要な関係保持のために努力する。自己の同一性が確立しているため、恐れることなく他者に対してやさしさに満ちた親密な関係を形成することができるのである。²⁸⁾ すなわち、自我同一性を確立した者は、他者の立場に立って他者を理解し、他者の活動と自己の活動を融合すること、そして共に連帯して社会を形成することが求められ、またそれが可能となるのである。

このような人間関係は、「愛」において顕著にあらわれる。この時期には他人を愛する愛、他者に与える愛、能動的な愛が形成される。そしてこの愛は、他者に与えて減少するものではなく、かえって深く相手の心のひだに入っていく深みと豊かさを備えたものとなっていく。そして特定の異性を生涯の伴侶として生活を一緒にしていく基盤ができ、この基盤の上に、双方の相互調整が働いて共同生活が維持されていくのである。²⁹⁾ そしてこのことは、結婚と新しい家庭の建設というかたちをとってあらわれる。一方、成人前期は、乳児の最初の心理社会的危機としての「基本的信頼」対「不信」を引き受ける環境となる。³⁰⁾

(7) 成人中期 (30 - 65歳)(生産性 - 停滞)

この時期、人は世代から世代へと生み出されていくすべてのものを生みだし、育て、創り出すという課題を担っている。それは、子どもをはじめ、事物・技術・思想・芸術作品等、広範なものの生産を意味している。「成人中期のおとなたちは、現時点における自己の生活の充実をはかると共に、長期的な展望に立っての目標達成のために自己がかかわり、その影響および結果を考える」のである。³¹⁾ そして、他者の欲求に応えることのできるのが、成人中期の大きな特徴の一つである。それは、「世話」と呼ばれるかたちをとる。それは、この時期の Virtue である「世話」、すなわち「この世に生を受けた者が共に生きることのために心くばりをする」ことにつながる。³²⁾ そして様々な形態の世話を行う中で、成人そのものがさらに人格を形成されることになる

のである。そしてこの時期の重要な特徴は、成人前期までに獲得したものを維持する時期としてではなく、「潜在的諸能力が開花すべく努力する時期」ととらえるべきものなのである。³³⁾

一方、この時期には、一つには肉体的衰えとそれに関連する精神的衰え、そして自己の潜在的能力の開花を妨げる多くの制約等による無力感等も生じるといような停滞現象もまた、生じる。

(8) 成人後期 (65 -)(自我統合性 - 絶望)

この時期の課題は、自我の統合である。自我の統合とは、「秩序を求め、意味を探す自我の動きを信頼する確信である」。高価な代償を払ってでも、世の中の秩序や精神的意義を伝えようとする活動である。自分の人生を唯一の自分に所属するあるべき人生だったとして受け入れる力である。³⁴⁾

そこでは、人はあるがままに存在する。そしてやがて、死に直面する。そして、そのことを静かに受け入れることができるだろう。それは、この時期にあらわれる Virtue としての「知恵」・「英知」である。しかし、それぞれの段階での課題を果たすことなくこの時期を迎えた者は、「死の恐怖、人生への絶望がおそってくる」。絶望の状態で人生の終期を迎えることになるのである。³⁵⁾

三．ライフサイクルと人類史の対応

本節では、人のライフサイクルと人類史の対応について、両者の間の類似性を対比しつつ概略的な説明を行うこととする。なお本稿では、人類史について考えるにあたって、基本的には古代オリエント社会から西洋社会を対象としていることを最初にお断りしておきたい。³⁶⁾

また本稿では、古代を三つの段階に分けて考えている。古代前期は、人類がその生存のほとんどを自然の生のままに依存していた段階であった。その後、紀元前10000年頃から農業が行われるようになった。これ以後を、古代中期としている。古代中期に文明が誕生し、人類の活動は様々な面において活

発となるのであるが、その後人類の思考や行動に大きな変化をもたらすようなものがあらわれた。それは、紀元前1000年頃の表音文字アルファベットの発明である。³⁷⁾これ以降を、古代後期とする。本稿は、以上のように古代を三つに時代区分して考察を進めることとする。なお、それ以降の区分は、中世、近代、そして現代・将来としている。なお、本稿では人のライフサイクルと人類史における各時期の相似性の説明に重点を置いており、Virtue や課題 - 危機についての詳細な説明は別の機会に行うこととする。

I . 古代前期（紀元前100世紀以前）

この時期、人類は生活の主な手段をほとんど自然のままの状態を得ていたと考えられる。生存のための最低の物質的要素である「衣食住」について見た場合、「衣」は、動物の皮に手を加えたただけのものであっただろう。この時期の人間は、全体が体毛で覆われていたと考えられる。「食」は、そのほとんどを狩猟や採集によって得られたものに依存していただろう。定住する直前の遊牧の段階において、一部、土地に働きかけて生産物を得るようなきわめて未熟な農業の開始はあったかもしれない。しかし、基本的に人類はその食糧のほとんどを自然の恵のままで享受していたと考えられる。そして「住」についてであるが、これについても自然のままの洞窟、あるいは簡単な手を加えた住まいであったと思われる。

以上のように、生存に必要とされる三要素に対する人間の関係は、基本的に受動的である。自らの意志をもって自然に働きかけて生産を行うというような姿勢は、基本的に存在しない。より多くの産物を得るだけの知識は、蓄積されただろう。すなわち、産物を得る季節や場所等の時間的、空間的な環境と産出量との関係等は、学習して伝えられることはあったと思われる。このような人類の生き方・行動は、基本的に人間の乳児期の行動に相当する。この時期の人類の行動は、自らの意志をもって主体的に働くのではなく、与えられるものをそのまま得る、盛んに取り入れるという乳児期の生き方と類似しているのである。乳児は、自分の欲求に応じて母親が与える応答から、

次に起こるであろう事柄を予期し期待することを学ぶ。これは、乳児の心の中に、次に起こるであろうことへの予測性が形成されるからである。³⁸⁾これと同じように、人類史においては人々は、季節のサイクルを知り、豊凶の予測や災害の前兆等を学習したと思われる。また乳児は、満足が与えられている時には、天国にいるかのような全面的満足に支配されるが、いったん、不満があつて満たされないとなると地獄に置かれたように声をかぎり泣く。深刻な不安や恐怖と全面的な満足の両極を行き来している。³⁹⁾これと同じように、この時期の人々は自然に翻弄される状態であり、ひたすら自然が平穏であることを願っていたと思われる。

Ⅱ．古代中期（紀元前100世紀～紀元前10世紀頃）

古代中期の最大の特質の一つは、農業の開始である。農業は、基本的に定住を前提とする。それはまた、人間が自然に働きかけて産物を得ることにつながる。自らの意志をもって自然への働きかけがなされる時、当然ながら、人間らしい顕著な発展が見られるようになる。たとえば耕地の改良や道具の開発等である。農業に関連した様々な作業において道具が用いられるようになれば、効率性は増大する。そして、道具のさらなる改善が行われるようになるのである。また、耕地の選定や土壌の改善等を含め、より生産性の高い土地を得るための知識も蓄えられるようになる。たとえば古代オリエントにおいて、チグリス・ユーフラテスの両大河の間の肥沃な三日月地帯に人々が早くから住み着いて農業を営んだことが明らかにされている。筆者も、この件については述べたところである。⁴⁰⁾この地域の農業は、灌漑農業であった。したがって、治水事業を遂行するために、王権の誕生が要請されたのである。以上のように、次に述べる文字の使用とともに、金属器の使用、国家の成立という文明誕生の条件が整えられたのである。

また、農業生産物としての穀物は貯蔵されたが、貯蔵によって農耕社会は、自然から一層の独立を果たしたのである。それだけではない。貯蔵を通じて労力の節約がもたらされた結果、仕事の専門化が進み、耕作民は余剰生産物

を、石工、陶工、織工等の職業集団の生産物と交換することができるようになった。そして、仕事の専門化と分業化、および生産物と貯蔵の増加によって次第に貧富の差が生じてきたのである。⁴¹⁾

以上のような農業の開始が意味するものは、幼児前期における行動と類似している。まず、この時期に、人生初期の三大事件とも呼ばれる「離乳」、「直立歩行」、「発語」現象が見られる。「離乳」は、農業の開始に相当すると見ることができる。すなわち、乳を与えられることは、自然の恵みをそのまま受け取る行為に類似している。それゆえ、離乳は生のままの自然からの分離を意味すると言えるだろう。そして「直立歩行」は、自然への働きかけに直結する。すなわち、幼児は、同じ所を行ったり来たり行動を、何度も何度も繰り返す。このようにして、生活の自立が始まるのである。⁴²⁾すでに述べたように、幼児はこの時期に様々な行動を行うようになる。それは、全身の筋肉が発達し、身体のコントロールが可能になるからである。この時期、幼児は環境を支配する一定の力を与えられるのである。そして、自らの意志で自律的に行動を行うこともしばしば見られる。自らの意志をもって自然や他者に働きかける行動において、両者は顕著な類似性を示すのである。この他、幼児前期には、物の所有者に興味を持つようになるという。「お父さんの」「お母さんの」というような、所有形がまずでてきて、次には「お父さんの」「お母さんの」という所有代名詞が出てくるといふ。⁴³⁾このような対応は、人類史における農業の開始とともに「所有」が徐々にあらわれてくることとも類似している。

人類史におけるこの時期のもう一つの大きな変化は、文字の使用である。たとえば古代バビロニアにおいては、紀元前3500年頃から文字が用いられていた。その後、古代オリエントの各地において楔形文字が使用されるようになった。楔形文字が、主に経済や商業取引のために考案され使用されたように、その広範な背景として社会の発展、遠隔地との交易等があった。この現象は、「発語」に相当すると思われる。一般に幼児前期になると、人は言葉を話すようになる。そしてコミュニケーションが盛んになる。このような現象

は、人類史における文字の発明・使用ならびにその背景となった活発な経済活動と類似していると考えられる。

この時期の Virtue は「意志」であるが、すでに述べたように、「意志力は、法と義務を受け入れる基礎」である。そしてこの時代に、人類の最古の法典と見られる「ウル・ナム法典」(紀元前22 - 21世紀)「リビト・イシュタル法典」(紀元前20世紀)「ハンムラビ法典」(紀元前18世紀)等が制定されている。⁴⁴⁾

Ⅲ．古代後期(紀元前10世紀頃～紀元6世紀中頃)

後期青銅器時代が紀元前12世紀頃に終わり、鉄器時代に入っていた。そして生産力は増大し、活発な生産、交易等の経済活動が展開していた。このような背景のもとで、諸民族、そして諸王国の盛衰を経ながら全体としては文明を進展させてきた人類史において、紀元前1000年頃に一つの飛躍が起こった。シュメールの絵文字から表音文字のアルファベットがつけられたのである。これによって、部族の呪術的、伝統的な世界から、画一的な視覚媒体の世界への転換が進むことになったのである。それはまた、聴覚世界から視覚世界への転換でもあった。⁴⁵⁾「部族的文化では、個人あるいは個々の市民という存在は考えられない。彼らの空間や時間の観念は連続的なものでも、画一的なものでもなく、相互に感応し合う、濃い密度をもったもの」⁴⁶⁾であった。部族的文化では、聴覚的生活が経験を強く支配するから、視覚的価値は押さえられていた。しかし、表音文字であるアルファベットの出現によって、視覚以外の感覚の役割は低下することとなったのである。⁴⁷⁾このように、「アルファベットはその文字の形と音が、語義的なことばの内容から独特な具合に分離されたので、文化の変換と同質化をつくり出すもっとも徹底したテクノロジーとなったのである」⁴⁸⁾そしてあらわれた現象こそが、部族文化からの個人の離脱であった。もっとも、このことがただちに進展したのではない。表音文字のアルファベットの出現以降、そのような土壌が徐々に形成されつつあったということである。そしてそれは、部族を中心とした共同体の弱体

化への第一歩であった。そしてその背景として、商業の発達を始めとする産業の進展があったのである。

またこの時期、ギリシアの諸都市間にさかんに同盟が結ばれたが、その背景には金属工業の技術、貨幣制度、大規模な貿易等の発達があった。⁴⁹⁾ すなわち、いずれも広汎なコミュニケーションを必要としていたのである。このような状況は、積極的に動き回る幼児後期に類似している。また、幼児後期には言語能力が発達し、文字そして数字等の体系化された記号への興味を示すようになる。幼児後期には、言葉が著しく発達する。行動を通して外界にかかわることから、言語的に外界に働きかけてゆくことへの移行が顕著に示される。そして、言葉（象徴）を用いてその物を表すことができるようになる。⁵⁰⁾ このような現象は、古代後期の人類の活動と類似しているように思われる。

また幼児後期には、自己の外的世界に対する積極的な概念的探索を行う。概念化により、外的世界の秩序性、規則性を得て、安定したものとしてとらえて自分の支配のもとにおこうとする。⁵¹⁾ これは、「原始時代には宗教的な力に基づくものとされていた様々な現象を、人間の理性によって、論理的に説明しようとした」⁵²⁾ 古代ギリシア哲学の隆盛と類似しているように思われるのである。

Ⅳ．中世（6世紀中頃～13世紀中頃）

本稿では、中世の開始をゲルマン民族によって西ローマ帝国が滅亡させられた6世紀の中頃から13世紀中頃までとして論を進める。そしてルネサンスから大航海の時代等は、次の近代において説明する。⁵³⁾

中世ヨーロッパを特徴付けるものの一つは、一見「停滞」的とも思われる現象であろう。農業生産や人口においては、全体的にみて顕著な増加は見られなかった。しかしその原因をつぶさに見た場合、そこには気候の大きな変動と度重なる疫病の流行等が発生していたのである。このような恵まれない状況の中で、中世社会は農業生産や人口の減少を何度も経験しながら、それらを回復させ、結果的には以前の水準を維持してきたのである。他方、中世

社会を特徴付けるもう一つのもは、キリスト教の価値体系の圧倒的な大きさであろう。中世の文化は、基本的にキリスト教をベースとしていたと言っても過言ではないと思われる。「9世紀から14世紀まで、ローマ教会は西欧世界の揺るぎなき支柱として君臨し続け」た。⁵⁴⁾そしてそこには、ローマ教会を頂点とする秩序の維持が最重要課題の一つとして存在していたのである。⁵⁵⁾

以上のような現象をもって、中世ヨーロッパ社会を「停滞」とか「暗黒」と見る見解が支配的となったのではないかと思われる。たしかに、そのような面があったことを筆者は否定しない。しかし、より詳細に眺めた場合、筆者は中世のヨーロッパが「停滞」や「暗黒」というよりもむしろ次の近代へ向けての準備、それへ向けての蓄積の時期であったと見る事が可能であると考えている。そしてそれは、たとえば修道院における学問の発達や技術の改良、そしてまた、職人の同業組合（ギルド）等における技術の蓄積と改良等に見ることができるのである。

中世の時代を、筆者は人のライフサイクルの児童期と対比させて考えたい。そして両者の類似点は、次のようなところに見ることができる。すなわち、両者とも一見停滞的と見られるところがあることである。しかし実は、そこにおいて次の時代へ向けての準備や蓄積がなされていることである。そもそも中世社会では、思想の中心に神とか来世が置かれていた。⁵⁶⁾まさに、蓄積の時代である。そして中世は、激しいエネルギーを宿した時代と考えることができるのである。鑪幹八郎氏は、次のように記している。「石の壁に囲まれていて、危機の状況にあってもそこから抜け出ることができない時、私たちはどうするだろうか。多分、慌てふためき、泣きわめくだろう。それでも壁が動かないならどうするだろうか。じっと対峙するよりほかはないだろう。幼児が親の力に出会う状況はこれと似ていると言えないだろうか。幼児は、親の圧倒的な力や命令と対峙しながらこれを受け入れる。親の命令は強力である。幼児の反抗も強烈である。幼児はこの反抗を土台にして、親の命令や権力の力を主体化してとり入れることになる。言うなりになるのではない。主体的に妥協しながら外の力を自分の内にとり入れる時、その統制する力が自

分の力となっていく。(中略)この妥協の結果が外界と自分の心の内側との調和でもある。このようにみると、調和とは静的世界ではなく、激しい動的な葛藤の世界である。勢いよく回転しているコマが、一見静かに立っていると見えるように、内的に激しいエネルギーを保持している状態である。⁵⁷⁾人類史については前述の通りであるが、人の児童期においても勤勉に働き、多くの知識・技術を習得する行為がなされていることである。修道院における技術の開発・蓄積等はいくち知られているところであるが、その「修道院の生活は、私有権を持たない共同生活、目上の者に対する服従、労働の義務などをその特徴とする」のである。⁵⁸⁾また、児童期における知識欲の拡大・発展は、中世後期における知識欲の外的世界への拡大・発展と類似しており、それらは大航海やルネサンスの時代につながることとなるのである。

また、児童は親の態度や価値観・世界観を内面化するようになる、と言われる。⁵⁹⁾これと似た現象は、人類史においてもキリスト教的価値観の人々の内面化に見られるところである。

V. 近代

11世紀中頃から、ヨーロッパではそれぞれの地域において国という新たな形態がとられるようになってきた。そして初めはスペインとポルトガルが、そして後にはイギリスやオランダ等が、新たな外的世界へ展開するようになった。すなわち一般に大航海と呼ばれた外的世界への大規模な展開の時代が始まったのである。この新たな地理上の発見は、「14世紀から18世紀にかけてのヨーロッパの膨張運動の現れだった。この運動によって開かれた新たな航路は、民族間の距離を縮め、諸文明の孤立を解消し、世界に大きな変革をもたらした。」⁶⁰⁾それは、伝統的な社会構造を覆し、「世界経済」を生みだし、近代産業が発展する素地をつくった。そして、資本主義を発達させた。⁶¹⁾このような対外的拡大は、香辛料や砂糖がすでに不可欠となっていた食生活のためばかりではなかった。「生産量が増大し続ける織物工業の原料と流通市場の確保、急速に発展する商業活動に不可欠な大量の貨幣の供給、さらに貨幣の鋳

造およびその価値づけのために必要な貴金属の調達など、差し迫った問題があった」のである。⁶²⁾たとえばイギリスを例にとった場合、国内では18世紀中頃より産業における技術面での著しい発展が見られた。それは、とくに紡績業において顕著に見られた。以上のように、ヨーロッパ全体を眺めた場合、徐々に進展してきた商工業の諸活動は、18～19世紀には急速に発達してきたのである。そしてその広範な背景として、人々の旺盛な経済的・文化的活動が存在していたのである。これらの活動に伴う産業の著しい発展は、エネルギーの調達・使用および運輸等の他の経済活動を大きく刺激し、産業革命と呼ばれる人類史上の大変革をもたらすこととなったのである。

以上のような社会的・経済的大変革は、人のライフサイクルにおける青年期の身体上の大きな変化と類似している。そして近代のエネルギーに溢れた経済活動は、青年のエネルギーを象徴しているように思われる。

一方、近代に至る過程において、ルネサンスと呼ばれる広範な文化活動が見られた。14世紀頃にイタリアを中心に栄えた南ヨーロッパのルネサンスは、「神から人へ」という画期的なものであった。そしてその関心を現世へと向ける作用をした。しかしそれは、現象的には未だ中世の性格を濃厚に宿していた。しかし、その後に展開した北ヨーロッパのルネサンスは、それがやがて宗教改革に繋がるという点において、近代としての性格を有するものであった。ところで、ルネサンスが人間の存在そのものを追求しようとする限りにおいて、それは中世的価値観の克服という性格を有していた。そしてルネサンス時代の哲学である人文主義は、人間を世界の中心にすえることで新時代の幕を切って落としたのである。⁶³⁾そしてそれは、「自分は何ものか」「何をなすべきか」という、人のライフサイクル上の青年期におけるアイデンティティの追求ときわめて類似していると思われる。また、近代初期に希求された一つのキリスト教的価値観からの「解放」、そしてその後に展開された「自由」の追求、個人主義は、ライフサイクルにおいて青年が探求してやまない「解放と自由」、一人の人間として認められたいという欲求ときわめて類似しているように思われる。そしてその後の近代において共通認識の一つとなった「民

主義」は、青年期における仲間集団との語らい、そして相互理解と共通するものが多いと考えることができるだろう。

Ⅵ．現代・将来

現代社会を特徴付ける最大のものは、おそらく「情報化」であろう。筆者は、人間のつくったものはすべて人間の身体機能の外部化であると考えている。そして、情報化社会における機器は、人間の中枢機能である脳機能の外部化であると考えられる。すなわち、人間の思考をコンピュータという機器を通して実現しようとするものである。

ところで、情報化社会における現象面での最大の特徴は、ボーダーレスとインタラクティブであろう。現代社会におけるボーダーレス現象は、産業界においてすでに現れている。たとえば、日本における金融事業における変化を見れば、それは明白である。戦後、長い期間にわたって日本の金融事業の特質の一つであった銀行・証券・保険等の各業界間を区別してきた堅固な壁は、今やほとんど崩壊している。すなわち、それぞれの間に存在し続けてきたボーダーが消失しようとしているのである。これは、国際化時代における国境のボーダーの弱体化とも関連している。そしてこれと連動して生じた現象が、金融機関を初めとする業界の内外を通じた合併・連携である。このような業態内外を通じたボーダーレス現象は、日本に限らずすべての先進国に共通に見られる現象である。以上のような、同質あるいは異質の企業・事業における合併や連携等は、人間のライフサイクルにおける結婚やそれに関連する様々な交際に代表される多様な結合と類似しているように思われる。

一方、インタラクティブは一般に双方向通信と言われている。それはたとえば、テレビ番組等における視聴者参加というかたちですでに実現している。このように、形式的には相対立するもの同士が相互に意見を述べあってそれを調整あるいは融合して新たなものをつくりだすことは、企業等の合併や連携においても見られる現象である。

以上のように、情報化社会が同質・異質のもの間における結合を一つの

ライフサイクルと人類史

特徴とするならば、それは人の成人期における状況ときわめて類似していると言えるだろう。企業・組織等は新たな成長・発展を目指して合併・連携を行う。これは、人における結婚に相当する。前者において最も必要とされることは、相互における深い信頼関係であろう。これは、成人期における「愛」に相当する。そして、その後の新たな生命の誕生に代表される諸々の産出・生産、それは情報化社会における様々な新たな生産と考えられるのである。

以上述べてきた人のライフサイクルと人類史の対比を表にまとめておこう。

(表1) ライフサイクルと人類史の関係

ラ イ フ サ イ ク ル		人 類 史	
乳 児 期	親（とくに母親）に依存 受動的生き方	古代前期	自然に依存 受動的生き方
幼児前期	離乳 自らの意志で行動する 直立歩行 発語 所有に対する関心 意志的行動	古代中期	農業の開始 自然に働きかける 自然への働きかけ 文字の使用 所有の発生 法典の制定
幼児後期	言語能力が発達 身体的に活発な行動 外的世界に対する概念的探索	古代後期	表音アルファベットの発明 技術、貨幣、貿易等の発達 ギリシア哲学の隆盛
児 童 期	停滞的現象 次代へ向けての蓄積 知識・技術の習得 親の態度や価値観の内面化	中 世	停滞的現象 次代へ向けての蓄積 技術の開発・蓄積 キリスト教的価値観の内面化
青 年 期	青年のエネルギー アイデンティティの追求 解放と自由の追求 仲間との語らい、相互理解	近 代	近代のエネルギー 中世的価値観の克服 キリスト教的価値観からの解放 民主主義
成 人 期	異質のものの統合 結婚 愛	現代・将来	異質のものの統合 合併・連携 深い信頼関係

四．今後の課題 むすびにかえて

「人間とは何か」、「人はいかに生きるべきか」。これはすべての人にとって、永遠の課題であろう。人は誰でも自分を愛する。自分を大事にする。これが極端になれば、「自己中心主義」となる。一方、我々は「己を愛するように隣人を愛せ」という言葉を知っている。これは、永遠の言葉である。そして、我々は誰でも他人を大切にすることの重要性を、頭では理解している。しかしそれが現実の行動となること、そして日常的な生き方となることは、きわめてむずかしい。

すでに述べたように、現代は人間の成人期に相当する。そして成人期は、思いやりをもって他者を世話するということが求められる時期である。現在の社会を生きるすべての人々が、成人期にふさわしい社会を築くことを求められているのである。そのような課題に応えるためには我々は如何にあるべきか、今我々はこのことを真剣に考えることが必要であろう。どのような人類史を形成していくか、それは現在および将来の人々の肩にかかっている。そしてこの問題に取り組む場合に重要なことは、青年期の課題であるアイデンティティが確立されそれを背景として忠誠心が保持されることと同じように、近代社会においては課題とするものが追求され、それが克服されたかどうかということである。そして同様のことは、すでに過去のものとなっていると同時に現在に引き続いている人類史上のそれぞれの段階においても問われるべきであろう。

すでに述べたように、本稿は、混迷する現代にあって将来の指針となるべきものを模索する過程で生まれてきたものである。そして本稿では、考察の範囲を人のライフサイクルと人類史の相似性について提起するに止めた。人類史のそれぞれの段階における諸問題、すなわち人のライフサイクルにおける課題に相当するものについての考察、そしてなによりも Virtue と人類史との関連についての考察は、今後の研究における課題である。そしてそれは、

ある意味では喫緊の課題でもある。筆者はこの課題を、「個と共同」という、筆者がこれまでもささやかながら取り組んできたテーマを軸として展開していく中で追究していきたいと考えている。また本稿では、人類史を基本的に古代オリエントから西洋社会を対象としたが、本稿で提起した問題は、原則的に日本をはじめ各国の歴史あるいは民族の歴史においても基本的に妥当するものと、考えている。このほか、前提とした事項についての検討も必要かもしれない。

このように多くの問題点を意識しつつ、とりあえずここで筆を擱くこととしたい。なお、筆者はこの拙い問題提起に対して、できるだけ多くの方々のご批判を頂戴することを切に願っていることを、最後に記しておく。なお、本稿の一部は、2008年3月11日に「共済理論委員会」で発表した草稿（『共済と保険』2008年7月号に掲載予定）と一部重複していることも、併せてお断りしておきたい。

本稿を、今は亡き生瀬克己先生の御霊前に捧げる。

（本稿を執筆するにあたって、基本的に同じテーマで発表された前研究があるのではないかと思い、調査してみた。しかし、今の段階ではそのような研究を見出すことができない状況である。もし御存知の方は、是非御教示をお願いしたいと、切に願っている。）

注

- 1) 江原昭善、『人類 ホモ・サピエンスへの道（改訂版）』、昭和62年、日本放送出版協会、第1章。
- 2) 主に以下の文献を参考とした。
 - ・ E.H. エリクソン、村瀬孝雄・近藤邦夫訳、『ライフサイクル、その完結』、1989年、みすず書房。
 - ・ 小口忠彦編著、『人間の発達過程』、1983年、明治図書出版。
 - ・ 鑑幹八郎、『アイデンティティとライフサイクル論』、2002年、ナカニシヤ出版。
- 3) 鑑幹八郎、前掲書、158頁。
- 4) 鑑幹八郎、同書、159頁。
- 5) 日比晁美、「序説三 人格の活力」（小口忠彦編著、前掲書所収）25 - 26頁。

- 6) 西平直、『エリクソンの人間学』、1993年、東京大学出版会、285頁を一部修正して引用。
- 7) 本節の記述の多くを、小口忠彦編著、前掲書および鑪幹八郎、前掲書に負っている。
- 8) 吉田博子、「Ⅰ 乳児期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 42頁。
- 9) 吉田博子、前掲論文、59頁。
- 10) 日比晁美、「Ⅱ 幼児前期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 52頁(なお、コントロールは不安や恐怖・苦痛ではなく、秩序に従うことによって安心感が与えられる方法である(鑪幹八郎、前掲書、163頁))。
- 11) 吉田博子、「Ⅲ 幼児後期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 72頁。
- 12) 鑪幹八郎、前掲書、164頁。
- 13) 吉田博子、前掲「Ⅲ 幼児後期」、67頁。
- 14) 吉田博子、同論文、75頁。
- 15) 同、75頁。
- 16) 同、71 - 72頁。
- 17) 同、72頁。
- 18) 鑪幹八郎、前掲書、164頁。
- 19) 吉田博子、前掲論文「Ⅲ 幼児後期」、76頁。
- 20) 池田裕恵、「Ⅳ 児童期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 86頁。
- 21) 鑪幹八郎、前掲書、165頁。
- 22) 光元和子、「Ⅴ 青年期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 105頁。
- 23) 光元和子、前掲論文、105頁。
- 24) 光元和子、同論文、107頁。
- 25) 同、109頁。
- 26) 同、112頁。
- 27) 山本礼子、「Ⅵ 成人前期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 124頁。
- 28) 山本礼子、前掲論文、123頁。
- 29) 山本礼子、同論文、126 - 127頁。
- 30) 鑪幹八郎、前掲書、177頁。
- 31) 山本礼子、「Ⅶ 成人中期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 136頁。
- 32) 山本礼子、前掲論文、142頁。
- 33) 山本礼子、同論文、138頁。
- 34) 鑪幹八郎、前掲書、171頁。
- 35) 山本礼子、「Ⅷ 成人後期」(小口忠彦編著、前掲書所収) 149頁。

ライフサイクルと人類史

- 36) ギリシア神話によると、フェニキア王の娘であるエウロペ (Europe) は、牡牛に姿を変えたゼウスによってクレタ島に連れ去られ、後にミノス王となる息子を生んだとされている。この神話は、「東から西へ、セム族の中東から当時はまだ「名前のない」大陸へと、植民者の集団ならびに西アジア文明の諸要素が移動したことを表現している、と歴史家はみる」のである (フレデリック・ドルーシュ総合編集、木村尚三郎監修、花上克己訳、『ヨーロッパの歴史』、1994年、東京書籍、9頁)。
- 37) 紀元前14世紀にフェニキア人によって導入されたという説も有力である (フレデリック・ドルーシュ、前掲書、12頁)。
- 38) 吉田博子、前掲「Ⅰ 乳児期」、38頁。
- 39) 吉田博子、同論文、31頁。
- 40) 拙稿、『古代バビロニアの生活保障 (1)』(『桃山学院大学経済経営論集』第36巻第2号、1994年12月、所収)。
- 41) フレデリック・ドルーシュ、前掲書、35頁。
- 42) 日比暁美、前掲「Ⅱ 幼児前期」、51頁。
- 43) 日比暁美、同論文、56頁。
- 44) 拙稿、『古代バビロニアの生活保障 (2)』(『桃山学院大学経済経営論集』第36巻第3・4号、1995年3月、所収)。
- 45) マーシャル・マクルーハン、後藤和彦訳、『人間拡張の原理』、1967年、竹内書店、107頁。
- 46) マーシャル・マクルーハン、前掲書、107 - 108頁。
- 47) マーシャル・マクルーハン、同書、108 - 109頁。
- 48) 同、111頁。
- 49) フレデリック・ドルーシュ、前掲書、50頁。
- 50) 吉田博子、前掲「Ⅲ 幼児後期」、68頁。
- 51) 吉田博子、同論文、72頁。
- 52) フレデリック・ドルーシュ、前掲書、46頁。
- 53) 中世ヨーロッパは、ローマ帝国、キリスト教、ゲルマン民族という三つの要素に基づいて成立した (フレデリック・ドルーシュ、前掲書、127頁)。
- 54) フレデリック・ドルーシュ、前掲書、25頁。
- 55) 「西欧の諸民族は、政治的には分裂していたが、同じ信仰を持ち、ローマに本拠を置く至高の精神的権威を認めるという点においては、統一されていた」(フレデリック・ドルーシュ、前掲書、120頁)。
- 56) フレデリック・ドルーシュ、前掲書、185頁。
- 57) 鐘幹八郎、前掲書、195頁。

- 58) フレデリック・ドルーシュ、前掲書、120頁。
- 59) 池田裕恵、前掲「Ⅳ 児童期」、98頁。
- 60) フレデリック・ドルーシュ、前掲書、196頁。
- 61) フレデリック・ドルーシュ、同書、191頁。
- 62) 同、196頁。
- 63) 15世紀から18世紀にかけてヨーロッパは、文化的コスモポリタニズムを体現した
(フレデリック・ドルーシュ、前掲書、28頁)。